助動詞における日・琉関係

大　津　不二也

I　序　論

二・三の試論で，動詞・形容詞の活用や語彙についての日・琉関係を見て来た。

文献以前の両者の言語的関係が同系であったか，方言的差異程度のものであったか明確にし得ないが，琉球語が古来の伝統を保持して来たのに対して，日本語は西暦1世紀頃から9世紀頃にかけての日・支の文化的関係によって，漢語・漢字の輸入，シナ語を通じての梵語の渡来，撥音・促音・拗音の発生，字音語の発生などと，伝統的日本語は，その姿を変えた。琉球では，土侯国の分立，三山（三王国）の対立・三山の統一を経て，琉球王国が成立し，琉球語はその政治・文化圏内で固有の伝統を保持しながら独自の発達をしたと考えられる。

13・4世紀頃の古代沖縄語（＝琉球語）の姿を偲ばせる「おもろさうし」や外国人使節の収録に見える琉球語（以後，古代沖縄語の代わりに，この称呼を用いる。）と，日本の最古の文献などに現われる日本語との比較は，限定されるが，日・琉共通基語の一端を推測させるように思われる。

しかし，琉球では三山統一後，日・支国交に伴なう京・鎌倉との交通関係や地理的関係による接触から来る日本語の影響，また15・6世紀以降の島津氏との政治・経済関係によって言語の上にも影響を受けたことも考えられる。

ここで，かつての琉球王国の政治・文化圏であった諸島の方言間の比較や，奈良時代・平安時代・鎌倉室町時代の日本語との比較によって，琉球語の固有語の姿を推察し，ひいては日・琉共通語の姿を偲ぶ一端としたい。

本論においては，「おもろさうし」などに見える，琉球王国時代の文語を琉球語とし，日本との国交，地理関係，15・6世紀以後における薩摩藩との関係によって影響を受けたと考えられる琉球語に沖縄語の名称を用いることにする。

また，＊は比較言語学における共通基語の再構形を示すものであるが，本論では，沖縄語の音韻変化を考慮して，その前段階の語と考えられる語を区別するために用い

ている。

本論は，推論の不十分な点や独断を免かれないが，先学諸賢のご批正・ご教示をお願いし，あえて草した。

Ⅱ 本　論

(1) 推量や意志・勧誘を表わす言い方——

a) Achā nun matsiri nde nu ayiga shabīra.

b) Kunu kakē akasa si ga, shibusaru hazi do.

c) Unju nu usudatini natōru uguisin yū fikīra hazi dēbiru.

d) Nā chūya nika natō kutu, mata acha chābira.

e) An shē, fēku ichabira. An shabira.

f) Mmadin kagudin nuyabira. Mma kara ichabira.

引例の説明——

a) 明日は　何の　祭りなどの　ありが　し侍ら。→明日は何の祭でしょうか。

b) この　柿は　赤いが，しぶくある　はずだ。→この柿は赤いけれども，しぶいだろう。

c) あなたの　お育てに　なっている　ウグイスも　よく　鳴くはずで侍る。→あなたのお育てになっているウグイスも，よく鳴くでしょう。

d) 最早や　今日は　おそく　なっているので，また　明日来ましょう。→もう今日はおそくなりましたので，また明日参りましょう。

e) そうしや　早く　行き侍ら。→それでは，早く行きましょう。そうで　侍ら。→そうしましょう。

f) 馬でも　かごでも　乗り侍ら。→馬でもかごでも乗りましょうか。馬から行き侍ら。→馬で行きましょう。

a) の shibīra←*shi＋*yabīra（←*yabīra←*habīra）。

b) の shibusaru hazido←*shibusaru〔←shibusan（しぶい）の連体形〕＋体言「はず（筈）」の対応形*hazi＋確言の意を表わす終助詞*do。

c）の fikīra hazi dēbiru は，*fikīra〔fikīyun（なく）の未然形〕＋「はず」の対応形*hazi＋「で待る」の縮約形*dēbiru の結合した連語。

d）の chābira は，*chi〔kichun（聞く）の連用形の語幹 ki→chi〕＋*yabira〔habiyun（侍る）の未然形の*fabira（←*pabira）〕の縮約形。

e）・f）の ichabiraは，*ichi〔ichun（行く）の連用形〕＋ yabira の縮約形。

f）の nuyabira は，*nu〔nuyun（乗る）の連用形の語幹〕＋ yabira の縮約形。（宮古群島では，hazi は pazu で現われる。）。

以上のように，推量は未然形だけを用いるか，あるいは用言の連体形に hazi（←*hazu）を，更にそれに助詞か助動詞かを付けるかして，推量するか，相手の意志を聞くか，相手を誘うか，するなど。これらは，国語と違う。

外に，Wāga uitumani yushiru kangē yayabīn（わたしがおいとまに参る考えやあり侍る。→わたしがおいとまごいに参る考えです。）のようなものであるが，使用の頻度も少ないので，ここには，省略。

(2) 過去・完了などを表わす言い方——

a） Duttu sukkwēshita tushi yassa.

b） Kurē mānu shumutsiya kara umutumi mishēbita.

c） Kundō intēno feku nukuku nayabitan.

d） Chinu du kunu yā kayabitaru.

e） Itsinu bashunu chuga yatara.

f） Na harun ufi du natōru.

g） Nna kusariti nēn natō sa.

h） Tidanu agaton.

i） Kusan kīn nna miduri njitōyabīn.

〔沖縄語圏の諸島語では，多少転訛しているが，大同小異である。一例を示せば，「友だちと約束した事も，みんなむだになった。」に対して

（沖縄本島） Dushitu yakusukusaru kutun muru daminata sa.

Dūshinchato yakusukushāru futun muru mudanatan.

（宮古群島 本島） Dusutu yakusukusūtalī kotomai mūna damin nalītalī.

(八重山群島 本島) Dushitū kimētukērī kutun muru yutturā nēnu.

八重山の kērīは，日本語の文語の「けり（keri）」の対応形と考えられる。〔沖縄本島から離れた先島(さきじま)に残ったのかも知れないが，今日は，その用例は他の諸島語にないようである。〕

引例の説明——

a） まことに たいへん 困りした 年よ。→まことに困った年ですね。ta は，tan（文語の「たり」あるいは「たる」の対応形）の連体形 taru の活用語尾を省略した下略形。

b） これは どこの 書物屋から お求め召し 侍った。→これは，どこの書店からお買いになりましたか。ta は tan の終止形。

c） 今度は ちと 早く 暖かになり侍った。→今年は，ちと早く暖くなりました。tan は，tan の終止形。

d） 昨日ぞ この家を 借り侍ったる。→昨日この家を借りました。du—連体形は，文語の係結「ぞ—連体形」の対応形。これは，文語の「こそ—古くは連体形後に已然形」の係結よりも古く，また「おもろさうし」にも現われるから，日・琉共通語時代に発生していたのではないかと考えさせる。taru は，tan の連体形。

e） いつの 場合の 人か あったら。→いつ頃の人であったか。tara は，tan の未然形。

f） もはや 春も 少なくぞ なりおる。→もはや，春も少なくなった。

「du—連体形」は，係結。toru は ton の連体形。ton あるいは tōn は，te（文語の完了の助動詞「つ」の連用形）に won（「おる」の意）が付いた連語の縮約形ではなかろうか。

g） みな 腐れて なく なっておるよ。→みな腐れてなくなった。tō は，終止形の活用語尾をとった下略形であろう。

h） 太陽の あがっておる。→太陽が，のぼった。ton は，終止形。

i） 草も 木も みな 緑 出ており侍る。→草も木も，みんな緑色に萌え出した。tō は，ton あるいはtōn の連用形の活用語尾をのぞいた下略形。

以上のように，過去を表わすには，「tan」，「ta」「ton あるいは tōn」が用いられている。「tan」は，文語の「たり」の対応形，ta は，口語の「た」の対応形であると考えられる。ton あるいは tōn は，～ti（←*te）＋*won の縮約形ではないかと考えられるが，音韻変化の説明に疑問を残すので，なお考究の余地がある。

その外，チャンバレーンは，次のような用例を掲げている。

Nūdīnu kākiti. のどが かわいた。

Kunēdā ww'atchi mishēbītī. 先日は ご機嫌ようありました。
（この間は 笑って おありでした）

Yyāya wakatī. お前は 分かった。→お前は分かったか。

Wāga njiti wuram bashu, tā yatin imenshōranti. わたしが出ていない場合，だれであっても，おいでなされなかったか。

〔琉球語便覧（A Hand-book of the Luchuan language for the use of tourists and residents, 1916〕。

又，他の資料のなかで，次のようなものがたまに見出される。

Yashiku nayabiti. ひもじく なり侍った。→腹がすいた。……atchin finaran duttu achihati dukuru yayabītasa.……歩いても はかどらず たいへん飽きはてた 所 あり侍ったよ。→歩いても はかどらず まことに飽きはてた所でした。

以上のように，ti も過去を表わすから，沖縄語では ti も過去の助動詞として用いられたことがあったと考えられる。ti は文語の完了の助動詞「つ」の連用形「て」の対応形であろう。

(3) 打消を表わす言い方――

a） Chūnu tinchē sangwatsi gurunu hadamuchē aran kaya.

b） Nagadē wugamin shabiran.

c） Kōbē ya tsibumi firakani.

d） Wannē gattinō san.

e） Madō nēran.

引例の説明——

a） 今日の天気は　三月頃の　肌持ち→気候や　ないかよ。→今日の気候は，三月頃の気候ではありませんか。ara は，an（「ある」）の未然形。

b） 長い程度は　拝みも　し侍らぬ。→しばらく　ごぶさた　しました。
shabira は，shun（する）の連用形 *shi＋*yabin の縮約形。

c） 紅梅は　つぼみ　開き侍らないか。→紅梅は，つぼみが開きませんか。
firaka は，firachun（「開く」）の未然形。

d） わたしは　合点や　しない。→わたしは　信じません。sa は，shun（「する」）の未然形。

e） 暇はない。nēra は，nēn（「ない」）の未然形。そうすると，nēran は，二重打消のように考えられるが，非存在を表わす nēn の未然形に打消の助動詞 n が付いたと考えたい。伊波普猷氏は，n は，推量の助動詞「む（mu）」の対応形であるとしておられる。しかし，沖縄語では，推量の助動詞 n はあまり用いず，推量の場合は未然形をそのまま用いることは，前述した。
nēn は，口語「ない（nai）」の対応形に終止形活用語尾「n」が付いたものであろう。口語の形からの転訛形で，後に入って来たものであろう。
nēran の「n」は，口語の打消の助動詞「ぬ→ん」の対応形と考えたい。
打消の言い方は，沖縄語圏諸島語においても同じである。（沖縄本島の北端国頭郡（くんじゃんぐん）において wakaran 宮古群島本島 susalīn，八重山群島本島 bagaranu）。

(4) 使役・受身・可能を表わす言い方——

a） Chikachi utabimishēbiri.

b） Ishani mishiti nūsi mashē arani.

c） Yurudu ufōku agarashura hazidēbiru.（以上，使役）

d） Nīshanu kamaran.

e） Chuttuni mītusariru shakō ayabirankutu, Chatan tō fisshirariyabiran.

f） Kumā mannin yatin yirarin.

g） An shē fēku urarira hazi dēbiru.（以上，受身・可能）

引例の説明——

a） 聞かせ たまひ召し侍れ。→聞かせ下さいませ。chika は，chichun（「聞く」）の未然形。chi は，奈良時代に盛んに用いられた使役の助動詞「す」の連用形「せ」の対応形で，語頭の chi の影響で，*se あるいは *si → chi と考えられる。

b） 医者に 見せて 見ること ましや あらぬか。→医者に見せるのが，いいぢゃありませんか。shi は，使役の助動詞「す」の連用形「せ」の対応形。

c） 夜ぞ 多く 上がらせるだろう 筈(はず)で侍る。→夜が，多く上がりましょう。shura は，奈良時代の使役の助動詞「しむ」の未然形「しめ」と関係があると言われるが，むしろ「す」の連用形「せ」と *wun（←won）との縮約形 *shiwun の未然形ではないかと考えられるが，なお考究したい。

d） まずさの かまれない。→まずくて食べられない。ra は，日本語の口語の可能を表わす助動詞「られる」の対応形 rarin の未然形。

e） ちょっとに 見通される だけは あり侍らぬから（←こと），北谷と比せられ侍らぬ。→ちょっと 見通される位ではありませんから，北谷とは比較されません。riru は，口語の受身の助動詞「る」の対応形 rin の連体形。

f） ここは 万人 あっても 座わられる。→ここは万人でも座わられる。rin は，口語の可能の助動詞「る」の対応形 rin の終止形。

g） そう しや，早く 売られる筈で侍る。→それでは，早く売れるでしょう。rīra は，rīrin の未然形。

沖縄語圏諸島語でも，shun や rin・rarin の系統の助動詞が用いられるので，引例は省略する。

rin，rarin は，平安時代（800〜）に用いられた受身・可能の助動詞「る」「らる」と同系の対応形である。

使役の助動詞としては，shun[註] 系統のものが多いが，伊波普猷氏は，奈良時代の使役の助動詞「しむ」の対応形 shimeyun が，まだ用いられることを掲げておられる。〔伊波普猷氏「琉球語と其の背景」P.123—124参照〕

しかし，「琉球語便覧（A Hand-book of the Luchuan Language, 1916）」には，その用例は見当らないので，口語的なものでなかったのではなかろうか。

註　例えば akerashun（開けさす），utashun（打たす），kirashun（蹴らす），wurashun（おらす）など言う。「さす」に対応する形がないのは，それの付く動詞が，早く四段化したためであると言われる。（伊波普猷氏前掲書P.123～124参照）。

(5)　敬意を表わす言い方――

a）　Uujō　nūn　gufukwē　yamishēbira.

b）　Bintō ya　umuchimishēbīmi.

c）　Wwābē　utuimishēbiri.

d）　Sigu　imen shēbiri.

e）　Ufanashini　imen shochi　kwimishēbiri.

f）　Unjōya nūn　gufukwēga　uyamishēbira.

g）　Asibiga　ichabīsiga,　unjun　imenshōrarīya　shabirani.

h）　Fitutūyē　umishi　mishōrariya　shibirani.

註……は，助動詞のような働きをするもの

引例の説明――

a）　あなたは，何の　ご不快や　あり召され侍ら。→あなたは，どこがお悪いですか。mishēbira は，mishēbin の未然形。mishēbin は，文語の尊敬の動詞「召す」の連用形*「召し（meshi）」に，「侍る」の対応形 *yabin の付いたもの（奈良時代の尊敬の言い方）（奈良時代に見え平安時代に盛ん）の縮約形と考えられる。「召し侍る」の対応形から考えて，平安時代前後の日本語の姿の反映か。ya は，an の連用形 ayi の活用語尾を取った下略形で，前の文節 *gufukwi＋*ya→gufukwē の影響で「y」を入れたものであろう。

b）　弁当は　お持ち召され侍るか。→弁当はご持参なさいますか。
mishēbīm は，mishēbīn の古い形である。

c）　上衣は　お取り召し侍れ。→うわぎを　おとり下さい。

d）　すぐ　おいで　し侍れ。→すぐ　おいでを　お願いします。

imen（「おいでになる。」「お行きになる。」）は，尊敬の動詞。shēbiri は shēbin の命令形。shēbin は，「さ」変動詞 shun の連用形 *shi に丁寧の補

助動詞「侍る」の対応形 yabin の付いたものの縮約形であると考えられる。imenshēbin を尊敬の言い方とみ，その命令形で丁寧な命令であろう。imen は，国語でその対応形を見出せないので，特有のものであろう。

e） お話しに おいで しおって 下さり召し侍れ。→お話に おいでなさって下さい。imen だけでも尊敬の動詞であるが，それに schochi のような尊敬の言い方を付け，更に kwimishēbiri を付けて，相手に高い敬意を表わした命令である。

f） あなたは 何の ご不快を お持ち召し侍ら。→あなたは，どこがお悪くありますのですか。uya は，尊敬の接頭辞。mishêbira は，「召す」の対応形の未然形 mishi に「侍る」の対応形の未然形 yabira の付いた形の融合したものであろう。

g） 遊びに 行きますが，あなたも おいで なされは しませんか。→遊びに行きますが，あなたも おいでになりませんか。imenshōrarī は，imen（おいでになる）＋ shōra（← *shi＋wōn の未然形 *wōra の融合形，「なしおろう。」）＋ 尊敬の助動詞「る」の対応形 rin の未然形 *ra ＋ *ya の融合した連語で，「なされませんか」の意味であると考えられる。

h） ひとおりは お見せ召されは しませんか。→ひとおり お見せ下さいませんか。u～mishōrariya shibiran をひとつの尊敬の言い方と考えてよいであろう。

なお，「侍る」の対応形 yabin あるいは yabīn を丁寧の補助動詞として用いる。（平安時代盛んに用いられた。）

例えば，

a） Mmakara ichabira（*iki＋*yabera→*ichiabira→ichabira）

b） Hanami ga chā yayabī ga（yabī は，yabīru の下略形か）

c） Sakurā Schinanu mashindi iyabīn.

d） Guyiryudu yayē shabiranī（*shi＋*yabira＋*ya→shabirani）

e） Chūya yī tinchi dēbiru（*de→*di＋*yaberu→*diyabiru→*diabiru→dēbiru か。）平安時代末から用いられた「である」の対応形であろう。

f） An dēbiru.

引例の説明——

a）　馬から　行きましょう。

b）　花見は　いかが　ありますか。

c）　桜は　シキナ（地名）の　よいと　言います。

d）　ご遠慮ぞ　ありは　しませんか。

e）　今日は　よい　天気です。

f）　そうです。

以上のように，「召す」の対応形 mishun，で，また「侍る」の対応形 yabin，であるいはこれらを結合して尊敬や丁寧を表わす言い方が有力である。

しかし，沖縄語圏諸島語で多少の相違がある。例えば，

「お風呂を　お召しになりましてから，お休みなさっては，どうでしょうか。」に対して，

（沖　縄）

Yu furu imisōchikara wēshimisōchē chā yabīga.（*misōchi＋*ya →misōchē）

（奄美大島）

Furo irimushochikkara yasumorin shocha ikyaga ariwon（*shochi＋ya→shocha か。）

（宮　古）

Yū furunkai palīza aittekara yukāmakkā nōshī.（ai は，alī の連用形 ayi の転訛か。）

（八 重 山）

Yūfurīkai pērōrittekara yukuiyōrukkā nōshidu urīnēra〔urī は，wun（おる）の対応形〕。

しかし，以上の用例で知られるように，動詞の連用形か又はその下略形に mi-shēbin か mishon（あるいは mishōn）かを接続するか，尊敬の動詞や連用形に助詞 ya を付けて，その後に shōn か shēbin かを付ける。

(6) 希望を表わす言い方——

a) Hashiruguchi akiti kwimishētē.

b) Ufē udanumi shitendi umutōyabīn.

c) Achā tachukutu, yī tinchini nashibusai bisa.

d) Kunu gurunu muyō ichidē mibushatakutu, umitachabitasā.

引例の説明——

a) 走り口＝戸口 あけて くれ召されたい。→戸口をあけて下さいませ。

b) 少し お頼み したいと 思って侍る。→少しお頼みしたいと思います。

c) 明日は 立つので，よい 天気になって欲しいですよ。→明日は立つので，よい天気になればよいなあ。〔a)・b) の tē は，口語の「たい」に対応するものである。〕。

d) この頃の模様は 一度 見たかったので，思い立ちました。→この頃の様子を見たかったので，思い立ちましたよ。（busha は，文語の「ほし」あるいは口語の「ほしい」の対応形 bushan の連用形の活用語尾をとった下略形と考えられる。）。

なお，沖縄語圏諸島語では，例えば，

「菓子が食いたいなあ。」に対して，

（沖　縄）kwāshi kamibusassā.

（奄美大島）kwashi kamubayā.

（宮　古）kwāsū fābāyā.

（八重山）kwāsī faipusā.

希望を表わす助詞「ばや」の対応形と考えられる bayā あるいは bāyā が，地域的にある。これは沖縄本島では現在用いられないようである。

tēは，後の日本本土との関係で「たい」の対応形として入って来たものであろう。

「おもろさうし」では，busha の形が見られる。そして，今日でも有力である。

これは，文語の「まほし」と関係があると考えられる。

(7) 様態や推定を表わす言い方——

a) Kwankōdayē chanugutoru tukuruga yayābīra.

b) Ninu (地名) itamirangutōru nchanurushi tuyishuru kutu, ……。

c) Ami fuyigisaibin.

d) Anē arangisan.

e) Yukushidu yayigisaru.

f) Nukuzinu yōna mun.

g) Ēya jōdikinu yōsi yayabīn.

引例の説明——

a) カンコウダイ（地名）は どの如くある 所で あり侍ら。→カンコウダイはどのような所でしょう。

b) 根の 痛まない如く 石ころ 取りすることが，……。→根の痛まないように石ころを取り除くことが，……。

〔a)・b) の gutoru あるいは gutōru は，文語の「ごとし」の直接の対応形とは考えられない。もしそうであるならば，to→tu と音韻変化にしているであろう。（平安時代→鎌倉時代・室町時代）沖縄語では～ u で，その次に助詞 ya が来ると～ō となるので，*koto→*kutu＋*ya＋aru（「an」の連体形）の縮約形ではないかと考えられる。この語は，連体形以外には用いられないようである。〕。

c) 雨 降りそうに侍る。→雨が降りそうです。（gisai は，gisan の連用形）。「おもろ」には見えないが，やはり沖縄語の独特の語であろうか。

d) そうでは ないようである。→そうではなさそうだ。（gisan は，終止形）。

e) 嘘ぞ ありそうである。→嘘を言いそうである。（gisaru は，gisan の連体形）

f) 残りのような物。（yōna は，口語の「ようだ」の対応形の連体形か。）

g) 藍は 上出来の 様子 あり侍る。→藍は上出来のようです。（室町時代に生じた）

（yōsi yayabīn の二文節をひとつの推定の助動詞のように用いたものであろう。）

推定の gisan は，沖縄語特有のものであると考えられ，琉球の政治・文化の独立

を推定せしめる。

(8) 断定を表わす言い方——

例えば，「白いのは　大根だ。」に対して，

（沖　　縄）　Shiruya　dekuni yasa.

（奄美大島）　Shirusan　munna　dēkuni yasa（稀には，断定の助動詞「だ」の対応形 ja が用いられる。）。

（宮　　古）　Susū　panā　upuni.（稀に，wun を付けることがある。）。

（八 重 山）　*Sisu　panā　daikuni.*（*yassā* や *dō* を付けることがある。）。

「この方は，山田さんと言う方です。」に対して，

（沖　　縄）　Kunu　ukataya　Yamadasandi　unnuki yabīn（uyuruchuya misen.）

（奄美大島）　Kun　chūya　Yamadasanchi　iyawom.

（宮　　古）　Kunu　ukatawobā　Yamadasanti du susailī.

（八 重 山）　kunu　pitō　Yamadasan du　ankuyū.

以上のように，沖縄本島では，yasa あるいは丁寧な yabīn あるいは yabin を用いる。先島（さきじま）（宮古・八重山）では，断定を表わす助動詞は用いないことが多く，時に宮古群島では「ある」「おる」に対応する Wun，八重山群島では an が用いられることがある。

(9) 推定の言い方——

a）　Yūdachinu　fuisōna　tinchē　ayabiran ka ya.

b）　Nama　fuisōni　ayabīn.

c）　Aminu　futōru　muyō　yabin.

引例の説明——

a）　夕立の降りそうな　天気や　あり侍らぬかや。—夕立の降りそうな天気ではありませんか。sōna は，様態の助動詞「そうだ（口語）」の連体形「そうな」の対応形。余り使用されないで，gisan，gutōru，殊に後者がよく用いられる。

b）　今　降りそうに　おり侍る。→今降りそうです。

c）　雨の　降っている　模様は侍る。→雨の降りそうです。muyō yabin は連

語であるが，「模様は侍る」のような連語の対応形である。

以上の引例で知られるように，連体形 sōna が用いられる。しかし，口語以外に余り見ないから，日・琉の関係が復活した後に沖縄語に入ったのではなかろうか。

以上の引例のように，助動詞についての文法現象には注目すべきものが多い。

推量や意志を表わすのに助動詞の助けを借らないで，活用語の未然形をそのまま用いる。万葉時代には，すでに「む，らむ，けむ，まし，らし，べし，めり，じ，ましじ」などが用いられているのに，これらの対応形は，琉球語には見出せないように思われる。（これは，日・琉共通語の姿かも知れない。）。

過去を表わすものは，「たり」か「た」の対応形だけである。奈良時代には，「つ，ぬ，たり（平安時代には衰え，鎌倉室町時代には「た」），り，き，けり」が用いられたことを想起する。

打消を表わすものは，文語の「ず」の連体形「ぬ」の対応形だけである。（これは，鎌倉室町時代の連体形・終止形との同形化の反映であろうか。）。

使役を表わすものは，平安時代に発生した「す，さす」の対応形であり，受身・可能を表わすものは，「れる，られる（「る，らる」は，鎌倉室町時代に一段化）」の対応形である。（これも，鎌倉室町時代の言語の反映であろうか。）。

尊敬を表わすには，「召し侍る」の転訛形を根幹とし，その前に尊敬を示す接尾辞「u（←*o）」や uya を付けたり，尊敬の動詞を用いたりする。また，動詞「くれる」の転訛形の連用形 kwi を付けることもある。（鎌倉室町時代に有力であった「候ふ」の対応形は用いられない。）。

丁寧を表わすには，「侍る」の対応形を動詞あるいは補助動詞にして用いる。（これは，平安時代の言い方を継承したかとも思われる。）。

希望を表わすものは，「たい」あるいは「まほし」の転訛形である。「たい」の転訛形 tē は，口語の段階から入ったものであろう。これは，busha よりも後来のものだろう。そのほか，終助詞「ばや」の対応形，「まほし」の転訛形の語幹または，その語幹に終助詞 sā を付けたものを用いる。

様態や推定を表わすものは，比況の「ごとし」（文語），「ようだ」（口語）の対応形や，沖縄語特有の gisan である。

そのほか，推量の丁寧な言い方として，未然形あるいは連体形＋「考え」の対応形＋「あり侍る」の対応形のような連語を助動詞のように用いる。また，過去の丁寧な言い方として，「ておる」の対応形の下略形（活用語尾を除いたもの，すなわち語幹）＋終助詞 sa 「ており侍る」の対応形を用いる。また，過去を表わすに，完了の「つ」の連用形「て」の対応形を助動詞の終止形のように用いる。使役を表わすに，まれに「しむ」の対応形を用いる。様態や推定を表わすのに，「様子あり侍る」のような連語の対応形を用いる。

今，鎌倉室町時代の日・琉交通や島津氏支配後の政治的・地理的影響によるものを確かにすることは困難であるが，これらの文法現象は，奈良時代の国語の状態を裏付け，あるいは補い，また遡っては奈良時代以前の日・琉共通語の姿の一端を想像せしめるものもあるように考えられる。例えば，国語と比べて助動詞が余り発達していないことや，用いられている助動詞から，奈良時代や平安時代の国語の状態の大部分を残存しているように思われる。

そのほか，沖縄語特有の文法現象もある。

そして，これらが，琉球王国と言う政治的文化圏の独立に負うことを認めざるを得ないと考えられる。